

【追想】

村上先生とハンチング帽

勝亦 啓文

私が桐蔭横浜大学に専任講師として着任したのは平成 17（2005）年のことであった。それまで非常勤講師として法学部の労働法の講義を担当させていただいていたが、たまたま専任としてどうかと声をかけていただき、専任となったのである。

村上淳一先生は、その頃、桐蔭法学に、「法のヒエラルヒーからヘテラルヒーへ」（桐蔭法学 11 巻 2 号 1 頁、2005）を発表され、ルーマンの社会システム論を前提とした法の構造理解に関する諸論稿は多くの法分野で議論を起こしていた、

当時の法学関係者には、本学は桐蔭横浜大学という名前より、「あの村上淳一先生がいらっしゃる大学」ということで知られていた。私も村上先生がいらっしゃるということは知っていたものの、週に 1 回だけの非常勤であったときは、直接お会いする機会はなかった。専任となれば、ドイツ法の大家であり法学全般に大きな影響を与えている村上先生とご一緒する機会もあろうと、期待とともに少し不安も抱いていた。村上先生の「権威」を恐れていたからである。

当時の桐蔭横浜大学は、現在の医用工学部の前身となった工学部と法学部の 2 学部のみのものであり（平成 20（2008）年にスポーツ健康政策学部を設置し、現在の 3 学部体制となった）、ごく小さな大学のため教員も非常に少なかった。このため、法学部の専任の先生方とは会議や廊下でお会いする機会は多く、専任となった後は、村上淳一先と会議で同席したり、廊下でお会いしたりする機会こそ多かったが、直接お話をさせていただく機会は、す

ぐには来なかった。

会議の席では、村上先生は進んで発言されることは少なく、要所で発言されることがあるくらいで、積極的にご自分の意見を述べられることもなかったように思う。また、廊下でお会いする村上先生は、いつも前をきつと向いて歩かれ、私が挨拶をすると、真面目な表情を崩すことなく軽く会釈をしてくださった。そのような村上先生の姿を見て、私は、村上先生はきつと俗事にこだわらない方で、常に学問のことを考えている寡黙な先生なのだろうと勝手に推測していた。

私は労働法を研究領域とする者であるが、当時、学会や研究会で私大系の労働法の先生方に、桐蔭横浜大学の専任になりましたと挨拶をすると、「村上淳一先生ってどんな方ですか?」と聞かれることが多かった。村上先生の業績と影響力を知る者にとって、村上先生が大学でどのような振る舞いをされているのか、興味津々であったのであろう。

私は、前述の推測もあって、「大学では研究室やサヴィニー文庫で研究していらっしゃるようです。寡黙で余計なことを言わない方ですね。まさに学者という感じですよ。」と話すことが多かった。

ところで桐蔭横浜大学法学部の桐蔭法学研究会では、新任者が自己紹介を兼ねて自身の研究分野について報告するしきりがあり（と聞かされ）、着任してしばらく経った後、村上先生を含む法学部の先生方がご出席される中、当時研究していたフランスの従業員代表制度について報告することになった。指導教授に修士論文の草稿を見せる前のような気持ちで報告の準備をしたことを覚えている。

村上先生は、労働法に直接かかわる分野の業績としては「ドイツにおける労働者代表制度の形成」(法学協会雑誌 99 卷 1 号 94 頁、1982) を著されており、ドイツで経営組織法が形成される経緯とその位置づけについて詳細なご研究をされていた。この論文はドイツの従業員代表制度を論じる際には現在も必ず引用される業績である。

その村上先生の前で報告をするというのは、針の筵に座らされる思いであった。なぜ針の筵かといえば、己の勉強不足を自覚していたというだけでなく、学問研究の場ではかなりアグレッシブな議論が交わされることがあるし、特に東大系の研究会では相当ハードなやり取りが普通だと聞いていたか

らである（私は私大の出身であり、東大の内情を知るわけではないので単なる伝聞である）。村上先生の人となりもよく知らない私は、相当程度絞られるのではないかと考えた。

当時フランスにおいても、産業全体の労働者利益を確保する労働組合の役割と、企業という限定的な範囲の従業員利益を代表する従業員代表制度の役割のありようが議論されている状況であったが、結局研究会での私の報告は、そうなっていますというものでしかなかった。

ひとしきり私が報告した後で質疑応答となり、いよいよ村上先生が発言された。これは相当程度お叱りを受けそうだと覚悟したものの、私の想像は裏切られた。

村上先生は、「どうしてドイツの従業員代表の研究をしないのですか？」と、いつもの真面目な顔を崩さず、しかし怒っている風でもなくおっしゃった。私は、「フランスの研究もまだ至りませんため、今後ぜひ勉強させていただきたいと考えております。」としか返答できなかったのだが、村上先生は続けて、「ぜひドイツも研究してください。」と励ましてくださった。

私のつたない報告に限らず、桐蔭法学研究会の場での村上先生は、誰の報告にもじっと耳を傾けたうえで、余計な言葉を付け加えずに本質的な問いをされるが多かった。私は、村上先生は普段から世の中の雑事には関心がなく、学問のことだけ考えていらっしゃるのだろうと（そうでなければあれだけの知識と研究ができるわけがなかろうと）、自分の中の神話をさらに作り上げていった。

私が本学に着任してからから1年程経った、土曜日であったか休業期間であったかは失念したが、通常の授業日ではない日であったことを覚えている。その日、私がエレベーターで法学部棟の1階から最上階の研究室フロアに向かっていたところ、途中の階から、村上先生が乗って来られた。その時の村上先生は、普段着られているスーツ姿ではなく、ジャケット姿で、黒いハンチング帽を被られていた。

それまで村上先生と二人だけでお話しさせていただいたことのなかった私は、率直に言ってこの状況にたいへんなプレッシャーを感じた。しかし、狭いエレベーター内でご一緒するのに何も話さないのもどうかかと考え、何か言わねばと数秒逡巡した結果、「素敵なお帽子ですね」という、今にして思

えば思慮不足というより、無礼な言葉を選んでしまった。

すると、村上先生はすこしニコリとされ、「そう？ もしこうというのが好きなら、銀座のトラヤさんで買えるよ。」と教えてくださったのだ。私としては、普段廊下でお会いしたときのように、表情を崩さないまま頷かれるとか、一言お礼でもおっしゃって沈黙されるといった展開を想定していたため、少々狼狽した。

その後、最上階に着くまでの間ひとしきりトラヤの話をさせていただいたのだが、私にとって帽子といえば学校の体育か農作業をするときに被ったくらいで、まったくの初心者である。話題の選択を誤ったと少し後悔したものの、村上先生は、いつもの真面目な顔で、トラヤさんで売っている帽子の説明をしてくださった。

エレベーターを降りた後、早速自分の研究室のパソコンで、「銀座」、「トラヤ」と検索してみると、トラヤ帽子店という、オーダーメイドを中心に扱う老舗の帽子店であることを知った。私は、嬉しそうにお店のことを教えてくださったことを少しだけ意外に感じていた。

その後村上先生と学内の研究会等でご一緒する機会も増えていったが、村上先生はいつも、穏やかに、しかし相手をまっすぐ見て議論を交わされており、ときには報告の後コンコンと机をノックし、「ドイツではね、こうやって賛意を示すんだよ。」と笑顔で教えてくださったこともあった（念のため書いておくと、私の報告のときではない）。

村上先生が本学の専任教員としてご退職となり、終身教授になられた後も、村上先生がご自分の研究室にいらっしゃったときにお会いする機会は多々あった。村上先生は自身で車を運転されて大学に来ることが多かったようである。そのときの村上先生は、スーツのときもあればジャケットのときもあったが、いつもまっすぐに前を向いて歩かれ、私が挨拶すると軽く会釈を返してくださるのは、以前となんら変わることはなかった。

しかし、いつの頃からか村上先生を大学でお見掛けする機会が減っていき、人づてに体調を崩されているらしいことを聞いた。そしてその後、村上先生の訃報を平成 29 (2017) 年の冬に新聞報道で突然知ることになった。

村上先生の訃報を聞いたとき、私は、エレベーターでお話しさせていただいたときの村上先生のお顔を、なぜか思い出した。まっすぐに相手を見つめ

る顔である。

村上先生は、精緻な分析と新しい視点で研究に取り組まれていたが、村上先生のその姿勢は、単に学問が好きというわけではなく、他者そのものと、多様な他者が共存する社会への強い関心と愛情によるものではないだろうか。

今さらながら思うに、村上先生は、学問研究の場でも、学問研究以外の場でも、決して権威的な言動をされたことがなかった。そして、その知見を常に真摯に提示してくださった。そうであるにもかかわらず、私は自分の中で勝手に作り上げた「学問の大家としての村上先生」という神話の構造を通してしか、そこにいらっしやる村上先生を見ていなかったなのであろう。先生は私のその至らなさを知っていながら、そのままの私と向き合ってくださいていたのだらうと思う。

村上先生と同じ大学で過ごせた幸運な期間に、そこにいる人と社会を泰然と観察し分析する姿勢に気づけなかった己の至らなさは悔やんでも悔やみきれない。

私は、村上先生を、比類ない学問業績を残された大学者としてだけでなく、銀座のトラヤを教えてくださいくださったときの、黒いハンチングを被って微笑まれたお顔とともに思い出すのである。

（かつまた・ひろふみ 桐蔭横浜大学法学部教授）